



目次

- 研究 深苗の其の取扱法に就いて 杉葉油の採取に就いて
- 隨筆 青森大林區管内に於ける森林労働 後の一年有半に就いて
- 文苑 和歌 春季習習談片々
- 報 學校便り 會員異動 領收報告
- 蘇門出身林區 奉職番附

大正八年六月廿五日 第百六十號 明治四十四年六月十四日 第三種郵便物認可

研究

選苗の其の取扱法に就いて

西澤生

造林の必要なることは既に一般の認むる所であるが、此事業たるや一見甚だ容易なるが如く見ゆるも、其の實頗る困難にして、利益多き森林を造成するには、學理及經驗より得たる智識と周到なる注意とを要するものである。

然るに、従來行はれたる町村林、私有林等の造林事業を視るに、往々豫期の成績を擧げることの出來ぬもの、あるは、國家經濟上大に遺憾とする所である。是れ充分なる智識と注意とに缺くる所ありしが爲にして、經驗少き時代に於ける造林事業としては己むを得ざる次第であるが何か將來は此の如き成績を以て満足することなく、從來の不成績を招きたる原因を探究して、之れが改善發達の道を講じ再び失敗を繰返さざる様努めなくてはならぬことである。依つて甚大なる注意を要すること多數あるも、就中苗木の選定は營林上林業の根本とも言ふべきものであるが、亦其の取扱の宜敷を得ざれば忽ちに不良苗木と化すべきものである。故に本題につき聊か愚見を述べんと欲す

るのである。

第一 選苗の標準

近年造林思想の發達と共に其の樹苗の選定に重きを致される様になりしも、尙苗木商人中には其の利を貪る如き例未だ其の跡を絶たぬのである、依つて左の事項につき注意を要すべきことである。

一、床替の回數

一概に論ずることは出來ないが、一般に山出苗としては、一尺乃至一尺七寸内外の丈で、すぎは滿三年二回床替、ひのきは滿四年二回床替、まつ、からまつ、はんのき、くぬき等は滿二、三年一、二回床替のものが出苗木として適當なるものである。

一、苗木の形態

幹部が丈夫で枝張りが良ろしく、全形恰も圓錐狀を爲せるものが最も可とする苗である。然るに偶々苗木の梢心延び過ぎたるを可とする者あれども、之れは外界に對する抵抗力弱く、即ち寒暑風霜に侵され易いから良しからず、根は寧ろ短かくして鬚根が澤山生えて居るものが良ろしく、苗木の色澤は樹種固有のものでなければ良しくない、例へばすぎの如きは冬期は少しく褐色を帯びるものである、之れに反して青々したのは肥料を過分に施したか、或は、秋になつて施肥せしか或は日蔭に育ちたることを證明し、此等のものは苗幹が纖弱にして一見不良苗木

たることが判かる、然るに民間では往々斯る苗木を賞讃し、又普通苗木を以て苗木良否の標準とし、根元の太さを標準とするもの少し、之れ苗木と根元周囲とは恰も徴兵検査に於ける身長と胸圍との關係の如きもので、其の兩者の割合により初めて良否を判定し得べきものである。又枝葉の硬軟はすぎ、ひのきの苗木に於ては植付即ち發芽前其の葉に手を觸る、ときは頑硬にして刺痛を感じ、冬季天然葉色を存するものを良苗とするのである、若し冬季苗木の上半は天然葉色を呈するも、下半は尚綠色を呈せるが如きものあるも之れ密植苗にして細長軟弱なる不良苗とす。

一、病菌の有無
特に近年杉苗赤枯病到る處に蔓延し、其の被害頗る大なるもので、注意を要すべきこともあると思ふから、少しく本病の特徴につき述べれば、杉苗の一、二年生のもの最も激烈に胃され、三四年生のもの之に次ぎ其れ以上のものは被害の程度大ならざるを常とす、而かして本病は最初葉の基部或は軟き小枝の分岐附近に顯れ、其の部分か初めは赤褐色となり、後には黒褐色に變じ、次で葉は枯れ萎み、且つ乾燥して遂に脆くなりて脱落するものである。
第二 苗木を得るの方法
民間に於ては只事業の繁を避くることのみ汲々として、其の成績の如何をも顧みざる者ある、即ち他人の養苗を購入し、或

は交換等に依り得ること多きも、之れを連年繼續事業にして、完全なる成績を擧げんとせば、可成自家養成苗に待つべきもので何とならば苗木選定上遺憾なきは勿論、植付後と雖も其の枯損歩少なく、亦成長も佳良なるに至る。併し自家養成苗とするには、自ら播種し床替せる後に山出苗木と爲せるを以て、手数は要するが安全である事は云ふまでもないが、特に行政事務を有する町村公共團體の如きは、執務上可成事業の繁を避けるの風あるも、其の造林事業の成績良好を期するが爲には、特に養苗上比較的簡易なる方法を用ゆるを可とし左に一、植林者自ら二年生の苗木を購入し、一回移植の上山出苗木と爲すが最も得策とす即ち植栽地の風土に慣れ、運搬費を節約し又植栽後と雖も其の成績の良好なることは期して待つべきものである。
一、大造林家或は、町村等の造林事業は或期間中は繼續事業の場合多きを以て、地元青年會、在郷軍人會、若くは地元有志者の農閑副業として養苗に従事せしめ、豫め相當價額を以て購入のことを協定し置き、造林時季に於て適宜掘取り植林するは、附近樹苗養成者なき地方に於ける最も簡易にして、且つ安全なる方法と思ふ。
第三 苗木の取扱

一、苗木受取後の扱方
苗木が目的地に到達したるときは、速に荷造りを解き、苗木の乾燥並に發熱に依る衰弱の模様を調査し左の方法により適當の場所に植を苗木の活氣力を見て更めて山地に植出するにあり。
(I) 根部尚濡り充分なるものは、直に山地に植付くるか、植付着手し得ざる場合は丁寧に假植し置くこと。
二、遠路運搬に依ることあり、殊に近時町村造林の如き然りて、運搬止乾天強風の日に避くると雖も、着荷まで四五日を要する場合は、途中降雨其の他種々の障害を受けることなきにしもあらざるを以て、特に細心なる注意を要すべきことである。
一、荷造り法
小苗木は五十本乃至百本、山出苗木は二十五本乃至五十本を一束とし、根部を接合せ合ひ小苗木は八百乃至千五百本、山出苗木は三百乃至五百本凡そ八九貫を一梱包とし、運搬中荷の崩れざる様を以て外被となし、其の上を三個所を結束するので、又運搬四五日以上に亘る場合は其の根及各小束の間に水苔或は藁屑の含水せるものを加へ、成るべく厚き藁を以て乾害なき様に努むるにあり。又汽車運船車馬等の途中幾日も費し且つ幾多の積み替へを要するが如き場合は可成苗木付添人を付し、種々の事故の發生防止に努め、以て一刻も早く目的地に到着せしむる様に取計ふべきである。

(2) 根部稍々乾燥せるものは、一晝夜間清水に浸し、或は水利不便の場合は清水に浸して直ちに假植すること
(3) 根部乾燥せるもの、或は蒸熱の爲衰凋せるものは、直接清水に浸し、枝葉の活氣を呈せるに至りて、假植或は山地に植栽するので、此場合水浸日数は二三日以上を經過するを避け、若し夫れにて回復せざるものあるときは、之れを假植し二週間位を經て白根の生せるもののみを選び、山地に植出すること。
以上述べたる所は、從來失敗せる造林地もあり、又將來失敗となる様なことはなきやとの杞憂もあり、再び之を繰返さぬ様注意すると、同時に危険を避け、可成安全なる事業に進む様心懸くること緊要ならんと信じ、愚見を述べたる次第である。(完)

杉葉油の採取に就きて 田中榮一

一、總説
秋田大林區署管内杉林斫跡地に於ける枝葉の多くは從來林地に遺棄せられ利用せらるること少なきのみならず却て造林地拵上多大の支障を來し之が爲め造林費を高むること尠からざる状況なりし其枝條は近來薪炭として相當に利用せられ今後益々需要を増すべき見込みなり然るに杉葉に至りては僅かに焚付及線香製造原料に供する外多くは林地を覆ひ造林の障礙をなすこと尠から

ざるを以て其利用方法に關し考究の所仙北郡荒川嶺山に於て浮游選鑛土植物性油を使用せることを知り其成分より推定するに粗製杉葉油の必ず之れに適すべきを信じ大正六年大曲小林區署管内牛澤又國有林の官行斫伐事業に附帶せしめ一斗余の粗製杉葉油を採取し荒川及尾去澤兩嶺山並三三嶺業研究所等に送致して試用せしめたるに從來浮游選鑛土使用せし「クレオソール」分解油及「ホタル」の混合油に比し其泡面に浮游する銅分著しく多量にして即ち右混合油を使用する時は幾分の土石分をも抱持するが故に泡面灰褐色を呈するに反し杉葉油に於ては帶黒金色にして其泡面の含ひ銅量の犬なること他の油に比し遙かに優秀なりと認められたる松精油に匹敵する性質を有することを確認したり但し本油は選鑛土最も重要な表面張力に乏しきため一時泡立つも消失し易く泡圍の收集困難なるの欠點ありと雖も表面張力の弱きは他油を以て容易に補ひ得るも故に今日選鑛土本油を使用し得るや否やは効力如何の問題に非ずして其價格の如何に在りとす。
然れども浮游選鑛法は我邦鑛業界に於ても最近漸く發達し初めたるものにして今後益々廣く各所に於て行はれ従つて之れに要する油類も其數量決して僅少なからざるべし此の故に全国各地に於て多量に産出し得る杉葉油を使用するに至らば林業鑛業兩界の祥事とす

尚林業試驗場に於て試験せる本油の百分組成を示せば左の如し
遊離酸(醋酸として) 〇.一%
遊離「アルコール」 三.一四%
「エステル」 三.二八%
「テルペン」 約三四%
「セスキテルペン」 約三〇%
香油 約一二%
結晶性「ヂテルペン」 約一八%
合計 一〇〇.五二%
斯くの如く成分研究の結果によれば杉葉油は其内に特に有價なる物質を含有せずと雖も其香氣新鮮爽快にして毫も杉の生葉の有する稍樹脂様の不快なる臭氣を交へず故に香料として種々の用途に供し得べし而して杉葉油の特點としては其原料殆ど無盡藏なる故に油も廉價に供給し得らる、にあり且本油は熱「アルコール」酸等に對して割合に安定なるを以て石鹼香料として用ひ易く又石油蒸餾の際の一產物にして頭髮油及精巧なる機械の減磨油として使用せらる、彼の「スピンドル」油及粗惡なる脂肪油等の消臭劑として用ひ得べし又歐米諸國に於て唐檜葉油を主成分とし之に少量の他の芳香油を配合したる室内香料を騰沸湯上に浮べて香氣を室内に放散せしめ宴會又は多人救集合する場所又は病室等に新鮮なる森林香を有することあり杉葉油は爽快なる森林香を有するを以て同様の目的に使用することを得べく又芳香浴の香料として用ひ得べし

二、杉葉油採取

土石を以て築きたる竈の上に一石二斗入の釜を据付けて蒸氣發生用となし其上に高さ一尺三寸上底徑二尺五寸下底徑二尺八寸八分の桶を伏せ上底に徑一寸二分の孔を通し...

青森大林區管内に於ける森林労働(承前)

千村 吉雄

第三章 労働者の就業並使用状態 労働者の就業並使用状態は各事業の異なるに於て此を異にし茲に悉く列挙するを得

すど雖も其主なる事業に於て概略を述べん 凡て國有林野に於ける事業遂行の爲めの人夫雇傭關係等は隨意契約によることを得る...

第一節 労働者の組織

第一款 斫伐事業人夫の組織 青森大林區管内各小林區署に於ける労働者の組織關係を見るに地方在來の慣習等により...

區分を厳正に實行せしむるときは一團の分割となり、且他の集團に混入する場合を生ずには彼等の最も好まざる所にして作業上の成績寧ろ良好ならず、...

第二款 造林人夫の組織

當管内造林人夫の組織として現に見るべきもの少なきも次に述べるが如き方針のもとに此れが組織を奨励しつゝあり

友林蘇岐

甚だ有利なる所なりと雖も深くにして觀察するときは斯くの如くして施行せる植付手入等は因より完全なる能はず、又人夫を募集するに當りても、系統的團體なき故に意の如く集合せしむるを得ず、...

第二造林人夫團の編成

造林人夫團の編成區域は山下村に於ける大字或は字を單位とするを可とし、一團の編成人員は人夫團の操縦、監督、訓練、造林面積の案配上より打算し普通三十三人とし其役割職務は左の如きを標準とす

Table with 2 columns: Role (取締, 植付夫, 假植夫, 計) and Count (一人, 二人, 一人, 三三人)

責を負ひ日常命令の傳達を行ふ (ロ) 嚮導は取締の麾下に在りて各人夫操業の嚮導となり、人夫と共に植付其の他勞役に従事し、兼て各人夫の意思を代表するものとす、...

人格を有するものたるべし

(ロ) 取締は地元村民に於て相當な資産と名望とを有し土地生産業に経験を積み人夫の模範たるべき品格を有し且二年以上國有林事業に従事せるものたる可し

簡所鮮からず尙又本人よりの御注意も

Table with 2 columns: Item (頁段行, 誤, 正) and Value (一一五, 二一五, 三二一, etc.)

全二六 設く説く 全二三 全全 全
 全二天 の天。夫。三一七 生高生有
 全全六 徒ら従つ 全二七 表削ル
 二二一 有余の有用 全二七 共箇其箇
 全全二 有森有林 全一九 火綿火線
 全全四 今旅業 全二三 高等豫算
 全全全 年材量年伐 全二五 前途歩道
 全二五を據く壞り 一二二 ぬる来る
 一一三「特權として」以下左の文句脱したり
 男子と同等の仕事に對し同等の報酬を要求
 するに至るべく茲に……

五月號訂正

頁段行 誤植 訂正 頁段行 誤植 訂正
 七二三 實行業 等 八二七 定夫人 又
 八一八 賣扣賣拂 全全六 備はる する
 八二七 年度制 全別 全三八 定任、住
 八一四 工夫人 九一五 述べし、ん
 八二三 八五五人 全全言 人夫の 夫數
 八二四 九七九、七

隨筆

朝鮮より

在城南新乙坡鎮 坂本光太郎
 校友會諸兄の御健全を禱る
 四月二十六日

後の一年有半(承前)
 口旅館の親切さ
 此の日は此處に一日休養しようと思へたが

雪の爲めに吹き下されし雪は積んで道に山
 をなし、約八九尺の高さに掘り割つて駄馬
 が通行して居る有様であつた。
 薄い冬の日には西山に傾き寒氣はますます加
 はり、手足は痛く頭はくわんとして眼は眩
 み、氣さへ遠くなる。茲に於てか余は將に
 斃れんとした。
 幸ひ其處に小さい一軒のヨボチビがあつた
 ので早速それに飛び込み、暖を探り少々元
 氣を恢復し、マツクンに勵まされ五六丁下
 つて来たが、日は暮れ近くなる寒さは刻々
 と身に迫るので、も早や進退此處に谷まり
 其の邊のアバラヤの様なヨボチビに入り、
 温土爐の焚口に立つた儘、一時間程身動き
 も出来なかつた。
 ヨボが親切に焼いて呉れる馬鈴薯に空腹を
 醫し、其の儘其處に背中のみ熱い腹の寒い
 温突に外套を被つて、冷い夢路をさ迷ふた。
 朝起きて見れば窓といふ窓は皆悉く氷にと
 ざされて、温突部屋の中にさへツラ、が下
 つて居るのである。
 これを見た自分は熱々考へた。此處で此の
 位寒くては惠山鎮あたりへ行つたらどの位
 寒い事だらう、それに任地はそれよりまた
 十余里も山奥の三四尺もある雪の中で毎日
 木材の検尺をしなければならぬ事など想ふ
 と、此の病後の衰弱した身では到底勤まり
 兼ねるやうにも考へられたので、折角此處
 迄来たが一層辭職して一先づ内地へ歸らう
 ともおもつた位であつた。

そこで余は此此厚時嶺を一名辭職時と名づ
 けた。
 駄馬をやとひたくても駄馬がない、止むを
 得ず翌朝も痛い足を引き摺りながら、厚時
 嶺を登つて午後二時頃黄水院に着いた。寒
 さは寒し足は痛し此處で宿らうとしたが、
 馬子はまだ少し早いから今二里程行つて宿
 らないと早く惠山鎮へ着くことが出来ない
 から費用がかゝつて仕方がないと駄馬を握
 ねてきかぬれで詮方なく馬子乃言ふに任せ
 てついて来たが、何處迄来ても宿るべき家
 はなし日は暮れかゝる、寒氣は増して来る
 馬子も今は困り果てしまひアイゴーク
 ーを連發してゐた。
 タンシンが強情を張つて来たから仕方な
 いきけば豊山へは一里半といふ事だから日
 は暮れても是非其處迄行けど叱り飛ばして
 やつて来ると途中にヨボが二人寒氣酷烈の
 ため人事不省になつて息もたぬ、眞青に
 なつて、將に凍死せんとして路傍に斃れて
 しまひに肩にかけたり足を持つたりして居
 るのを見たが如何ともする術もないので、
 其儘見過して豊山に着き憲兵派遣所に注申
 してやつた。
 うれしい事には丁度此の豊山旅館の中にス
 トープを焚いて居た事で、それに抱きつか
 んばかりに近寄り小一時間、ボンソンの焦る
 のも知らぬ位に感覚がなかつたのだ。
 翌日も其の翌日も痛い足を引き摺つた。途

中で行き逢ふヨボの顔を見れば皆氷の鬚を
 生やしてゐる。牛も馬もみな体は眞白にこ
 をつて口先にはつら、がさがつてゐるので
 ある。
 左足の指は凍傷に罹つてます、旅行に困
 難を感じた。然し駄馬がないので己しを得
 す歩むより仕様がなかつた。甲山より二里
 程手前迄来たが、跋曳の爲めに歩き疲れて
 泣いて居ると丁度其の時天の助けか、ヨボ
 がツリを引いて通りかゝつた、何處へ行く
 かと尋ねると甲山迄ゆくと答へたので、二
 十錢の約束で乗つて来たが歩いてゐる時よ
 りは手といはず足といはず体一面に寒くそ
 れに、をり、牛の奴め遠慮なしに糞便を
 頭の上の邊から、風上にあつて顔の前へポト
 ポトやるのには不埒閉口させられた。
 甲山の龜屋旅館乃女將は無愛嬌の姿で、客
 なんから来ても宿つて貰ふぢやなくて宿めて
 遣るといふ様な顔をして、お世辭の一つも
 いふ女ではないが感心な事に、圍碁には相
 當の腕を持つて居て客を相手に碁を圍むと
 きの如き、終りには主客顛倒して客などは
 念頭のない有様になるのは、皆一本當られ
 てしまふのだ。
 翌日はやうやくにして駄馬を一頭やどうて
 甲山を出發した。此の日は風の吹くのに雪
 さへ降つて来て、駄馬の背にて手と足の冷
 きには困つてしまひ途中に家のある毎に馬
 から下りては温を探り、橋頂里にては支那
 人の家に入り支那滿頭を腹一杯詰め込み、

丁度隣室にゐた客が成興警務部の人で銅店
 へ久原鐵業會社の機關の検査にゆく處だと
 聞いて、それならば甲山迄一緒にゆけるい
 、道連れであるから一緒に今日は北青迄行
 く豫定で、靴を大きなボンソンに穿き替へ駄
 馬を備つて荷物を負はせ出發した。
 此間約八里、朝の十時頃から發つて今日の日
 足の短い時に八里の行程は一寸無理ではあ
 るとおもつたが途中には旅館はなし幸ひ天
 氣はよし道連れもあるので安心して、親護
 りの自轉車に馬力をかけて途中晝食もせず
 やつて来たが、北青より一里程手前に於て
 日は全く暮れ寒氣は募り空腹をさへ感じ、
 二人とも意氣消沈將に泣き出さんとした。
 夢中になつて北青近く迄来ると向ふに提灯
 の火が見えた。勇氣を鼓してだん／＼近づ
 いて見れば大黒屋旅館と記した提灯で、先
 着の客が我々の事情を話して呉れたので、
 宿の息子がわざ／＼迎へに来て呉れたので
 あつた。
 宿へ着いたが手足は既に感覺を失つて用を
 なさず、よう物も言ひ得ず足を投げ出し、
 女將に鞋の紐を解きボンソンを脱がして貰ひ
 温突に入り火鉢を真中に對座した儘、一語
 も發する勇氣なく只相見合はして苦笑する
 のみであつた。
 早速風呂に飛び込み凍みを解かし夕食には
 「寒かつたでせう……」との心盡しの牛
 肉のスキ焼を御馳走になりヤットのことで
 蘇生のおもひがした。

駄馬は到頭其の夜は到着しなかつた。翌日
 は待ち合はせの爲滞りし、折角い、道連れ
 を得たと喜んだのも只の一日であつて此處
 に置き去りにされてしまつた。
 冬季の旅は日のある間しか旅行が出来な
 いので一日の行程は七里を以て最大限度と
 されてゐる。日暮れになれば甚しく氣温低
 下し殊に空腹の儘旅行するは大禁物で、實
 に危険である。此の爲めに凍死した例は少
 なくない。
 夏は子供を連れて旅行する人を見るに、鞍
 の兩側に石油箱を付けて其れに兒供を入れ
 て駄馬にて運搬してゐるのをよく目撃した
 が、今度一寸途中で見受けた轉任の憲兵の
 如きは兒供を蒲團の中に捲き込み、駄馬の
 鞍に横へ荷物同様の運搬をしてゐるのを見
 て妻子携帶者が北韓の旅行に如何に苦心さ
 れるかをおもひやられた。
 三日目には例によつて豆が二つ三つ出来た
 痛い足を引き摺りながら、名高い海拔六千
 尺の厚時嶺にまじかゝるや、此の日は丁度
 三寒に入つた日とて、寒氣吹き荒れ雪さへ
 ちらつき寒さはいはん方なく、中腹迄登りし
 時は吹雪は益々烈しく息は凍つて鼻下に玉
 をなし、襟巻は頬に凍りつき、手には手袋
 を二重にはめてオトボートのポケットに
 突込んで居たが、これも切れて落ちればか
 りに痛く終に毛布を折つて腕に巻きつけて
 抱きやうやくにして頂上に達して見れば吹

其の日は合井浦里に着き憲兵より米を賣つて貰ひ夕食を済した(未完)

赴任する迄

岩手縣廳にて 佐藤 誠一

學友に送られて怖いとか云ふ進み得ない思ひに住みなれし井を出でて波荒き大海に向つたのは卯月十九日の朝であつた

一時間余の休みを腰一つ下ろさず手荷物一つ持つて立ち通して居たが今それを思ふと哀れにもあり可笑しくもありだ再び車客となる驛夫の呼ぶ辰野の聲に先春の伊那踏破の壯快さ病床のK君を訪れし事ども交々腦中を巡つて學窓時代を顧想するには愈々

はず只ほかんくで過ぎた日頃呼び馴れて居た盛岡の聲! 間違ひはないだらうか併し確かに盛岡であつた車夫の誘ひる儘に腕車を驅つて縣廳に向つたが實際戰場に向ふかの如くに感ぜられて居た縣廳に着いて直に形式ばかりの辭令を受けて大人相手に今日までやつて居るが大海と云へば云へない事はないやはり井であつた

文苑

和歌

安井正夫

山口本會支局主事が本局へ榮轉の時送別會の席末に列し君が講演をきいて花もありもあゝるきみがここのはわこゝろにどめて忘れざりけり

以て充分なる材料であつた 僕の淋しい(心の中に尚一層悲しく思はれたのはトンチの頗る非常に多い事であつた本會の山猿連が大した差もない東京に田鼠生活をしないで行く事が出来ないかと思ふとインタージェクションや説無屈位では氣が晴れ様とも思はれなかつた

併し乍ら斯う云ふ淋しい悲しい内にも母校の事は忘れ得なかつたものと見ゆる夕陽は歿して馳せて出でし月光の車窓を照らすを見ては嘗て辯論會にK君が腕を組み恰も月を見下すかのスタイルにて「月は皎々と照つて居る僕は」云々と云つたあの活辯が思ひ出されて今迄の悲しき淋しさも忘れて心は又故郷を訪れるのであつた

「暫く沈黙……稍あつて」F「あのナイ明日は運動會だ」S「ホー仲々にヤリ居るネエ併し君は何もやらないだらう」F「何言ふ選手さ」笑聲は低く邊りに響くこんな話が床の中に取交はされた暫くして「S」下宿屋は「何ぼだい」と云つたが早や三角や珠算に大

身は古い花は若くもうちとけて さかりの人とくむを樂しき

春季實習談片々

愛山生

四月の朔日にあつたさりの始業式が行はれたさあ愈々明日から實習と定まつた、物は何事もさうである前には種々な希望や理想や彼様様とか自分定めはすれど然し中々實現せしめがたい

擔當苗圃

となつて見ると人に頼むと粗漏にされる様で一度頼んで効程を進めても見るが一年を使ふ組がない、習ふより慣れるで慣れたものに限る、始めの畦立ては實に苦勞で朝飯を振ると腕節が鳴る程疲勞をするけれど其後には毎日の仕事がせんと、思ふ通り仕遂げられる、どうしても人間には責任感を持たせるが必要だがそれに更に趣味を有たせることが肝要だと云ふことが解つて来る、活き物の宇宙に死物はない土も勿論活物として差支ない、乾けば粉々となり風が吹けば

成功した様な夢を見て居ると見えて無言であつた

空は薄青く晴れて風の強かつたのは翌日の天氣であつたF君に別れて所々見物したが余り見るものもないあの治外法權の旅行の様な氣分を味ふ事は困難であつた否到底望まれない事であるのだ其の後は早々上野驛近くに宿を取る

仙臺に着いたのは午後の四時を二十分過ぎる頃であつた此の地で愉快であつたのは宿屋の合客問題! 其の時の滑稽さは又どのいであらう赴任當時を物語る心とも軸ともなるものだと思ふ

雲となつて舞ひ上り油断をすれば鬚の様な草を生やし私等の懶惰を責め眞面目に働けば苗木も相應に出来る、私も土の信者ですだから地味も調へ種子の選定から種子の善悪の撰擇も施肥の注意から良く調査し試験し研究する、斯くて研究しよう云ふ自發心が起きて床替から押木分根法播種と云ふ風に飛び歩いて終日苗圃に腐心する、そんな法でも一度やつて見る、然し命名が面白い、それは皆何んでも西澤式と名づける、若し研究とか所置とかするに當つては斯うした經驗から出立せなければならぬ

山行

樹液の流動期が來てゐる爲苗圃もろこゝに一二年の植栽地地拵へしたのに打捨て、植込に行く、霧の晴れたばかりの谷間から好い香のする風が吹く、早起の彼の小鳥は面白さうに我等を待ち顔に裏の演習林に歌つてゐる、新しい林道が畧々完成し始めた爲村中や田圃道を通らなくもよい、然し馬や山羊の子を見たさに廻つて行く連中もある、それから坂道へ掛かる例の歌が揃ふ山彦が谷から谷には響き渡るそれも厭くと先頭早いぞと後より叫ぶと先よりは續け續けと打つて返す、林道の真下の發電所の落水が昨夜の雨でいつもより騒しい、迂曲した林道を漸く着いた、場所着半仕事と一息つける、各組へ苗運びとして一年三四人割當てにて取りかゝる、十一時頃から腹時計でやつつけろくで一時間休む、彼の縦や

梅は普請の役に立つとか此の苗木は柱にな
る迄は何年種子のなる迄何年とかその頃は
価格は幾何なと一一年生が問ひかける、先
生聞いて他生の返事をするを待ちける、呼
び合せて學校へ急ぐ、下り坂は早いもので
歸りは中々早い、中には草摘みや苗木を探
して来るものもある、山行は實に呑氣なも
のである

閉話

朝は一寸やつて食食でも朝祝と云つて休む
と言ひ乍ら休みだして僅に十五分間其間に
はよく新聞の話が始まる、珍聞するは此の
休みであらう、一年生が日時計を作つて黙
然と眠り笑つて獨り思ひ出してゐる、かゝ
る事はかつて一年であつた時に経験してゐ
る、今昔の感に打たれずには居られぬ、晝
の時間は永いので讀書に耽るものやラック
トを振り廻すものや弓をかつぎ出す砲丸や
圓盤や槍やを投げ出す、一年生は人のやじ
るのを聞いて笑つてゐる
午後の休みは短い此の休みには新卒業生の
行衛で自分等もあれこれと少しは頭を垂れ
ることもある、それから一番賑はせるのは
旅行談であらう、斯うして春季實習は不知
く相濟みとなる

あ、この山林生活は弘法大師をして高野山
に日蓮をして身延山に遠くは釋迦をして安
得山にと名をとめしめた、木曾の山林も天
下名ある緑樹を以つて鬱蒼たる森林である

(以上庶務部)

小幡 弘 藤田喜一 西牧 巧
木下 旭 森田孝太郎

(以上雜談部)

宮城吉雄 今野啓三 渡邊時夫
藤井 鈞 (以上擊劔部)

片桐英雄 中島省三 本南克己
上井乙之助 (以上辯論部)

前田早苗 荒木 要 早川秀雄
長谷川都 (以上庭球部)

大原猛志 柳澤虎三 伊藤 傳
山崎高男 (以上柔道部)

數野二郎 長谷川雲治 安江鏡太郎
高木榮一 (以上弓術部)

中田基一 藤井逸郎 高木萬平
池主鐵治 (以上遠足部)

會員異動

- 吉田佐十郎氏 朽木縣より岐阜縣廳山林課に轉任せらる
- 武居喜太郎氏 愛知縣東加茂郡加茂村段戸る製材事務所に勤務せらる
- 中垣英一氏 山林屬として今般福島縣安積郡郡山小林区署に勤を命ぜらる
- 米山太郎吉先生 今回都合に依り靜岡縣立豆陽中如校へ就任せらる
- 征矢朴郎氏 下記へ移轉せらる
- 京城府西大門通二丁目三十四番地 向井帷農氏 除隊の後今同樺太敷香郡内路村富士製紙株式會社樺太駐勤員詰所に奉職せらる
- 古澤久治氏 北見國宗谷郡猿拂村に轉任せらる

此の中で自然の靈動せる生命の焔に包まれ
美しい自然の懷に抱かれて養れ育まれて
行くかうした境遇が特別な性質を吾等に授
けて自然の力の詔律と共鳴した結果内には
智能く自由に發育し外に向つてはこれが益
々實現し内に外に活々と發動して行くであ
らう(愛山記)

實習と私

毎日の、天氣がつよく、今日もこの峽の
山の蔭から野火の煙が靜かに真直ぐに青い
空へ登つて居た。山が青くなつた。殊に演
習林の落葉松が鮮やかな新緑となつて山一杯
に擴がつてゐる。畑に立つて其の一本々々
をみつめてゐると何となく人の力といふ様
な尊さをひくと感じてくる。それに續いて
夏だといふ思ひが突き土る様に私の頭に閃
いた。苗圃で小さい苗木の床替へをした。
みんな黙つて壓しつけられた様な仕事をつ
づけた。日が輝く。あつた。

自分の細胞が溶け合つて流れる様な倦怠と
目まぐるしさを感じずには居られなかつ
た。つと立ち上るとふらふらとする、黒い
血の塊りがたまゆらに眼の底をよぎつて行
つた。土が白く乾いてはくはくはに浮き上つ
た。如露で水をかけるとじゅつと微かな音
を發して土の中へ沁みてゆく。併しそれも
忽ちの中に乾いて行つた。ひよろ／＼と並
べ植ゑられた赤い杉苗が殘虐なる力に虐
けられてゐる様に思はれてならなかつた。
でもかうして午後になつて校舎の方からが

ん／＼と鐘が鳴り渡ると皆が放たれた様に
はつとする。その鐘の音はある時は激勵の
聲であり又ある時は慰安の響でもあつた。
夕に近い日ざしを蒼い顔に受けて紫の影を
淡く地上に曳きながら私も歸つてゆく。疲
た跡には汗に土埃りが粘りつき飢いさでが
全身を領してゐた。本當に自らに姿を淋し
い惨めなものと思つた。

學校便り

- 修學旅行了る、二年三年は修學旅行とし
て同日に出發せるが二年生は五月廿一日三
年生は越後廿三日何れも途中無事豫定の
視察を終りて歸校せり
- 一年生は五月廿六日出發四日間の豫定を
以て縣下伊那安訪松本地方の視察を遂げ同
じく廿八日無事歸校せり
- 種痘、天然痘當地方に流行せるを以て感
染を豫防する爲め六月十日種痘を行へり
- 校友會各部委員選定今回左の通り選定せ
られたり
- 村松一郎 井戸利夫 千村重豊

(以上庶務部)

○岡西猛氏 森林主事として福島縣南會津郡檜原村第八號檜原保護區官舎に轉任せ
らる

○藏尾眞氏 山口縣玖珂郡廣瀬村吉川家林
事務所に在職

○山下藤一氏 六月中旬堤商會東京事務所
派遣員として露領沿海洲インペラトルス
カヤ港森林利用開發のため敦賀港出發同
地に向ふ筈なり

○山下常記氏 不明謹告致し置きし所今回
熊本縣下益城濱町小林区署に在職の由通
知ありたり

○服部啓次郎氏 林業技手拜命岐阜縣惠那
郡役所に轉任せらる

○山崎三男氏 青森縣北津輕郡相内村相内
小林区署官舎に轉居せらる

○小田實氏 第一次勤務演習の爲め九十日
間召集を被命下記聯隊に入隊せらる

○富山歩兵第六十九聯隊第十二中隊(豫備
役軍曹)

○榊原武重氏 東京市深川區塩濱町鐵道院
經理局木材防腐工場に轉職せらる

○温井誠一氏 山形縣東田川郡役所内に轉
任せらる

○月田喜代佐氏 秋田大林區能代小林区第
六號瀨川保護區官舎に轉勤せらる

○小林右内氏 松本歩兵五十聯隊第九中隊
に入隊せらる

○成瀬義郎氏 古河合名會社東京本社に在
勤の處今回伐木事業の爲め二年間甲府市
外御納戸小路に出張を命ぜらる

○小池茂樹氏 下伊那郡八重河内村王子製
紙會社樺谷伐木所に勤務せらる

○宮澤功氏 東京本郷區湯島の三蛟龍館に
轉居せらる

- 都竹武次郎氏 東京三菱本社に轉任せら
れ當分の間下記に出張在勤 宮崎縣
兒湯郡西米良村三麥米良山林事務所
○野知里慶助氏 東京府目黒村駒場東京帝
大農學部寄宿舎に轉居せらる
- 金井澄水氏 長野縣林業技手拜命公有林
係として更級郡役所駐在を命ぜらる
- 其の後決定せる者左の如し
- 岐阜縣益田郡竹原村大字 後藤 豊吉
- 乘政官行伐木事務所 星分 晴雄
- 朝鮮新義州製紙株式會社 青木 重俊
- 長野縣上田市小林区署 仲谷 馨
- 下伊那郡上村王子製紙株式會社 山崎 多門
- 下伊那郡八重河内村王子製紙株式會社 坂卷 利一
- 梶谷伐木所 堀谷 利一
- 木曾王瀧川川伐木事務所 出雲 運平君
- 宮川先生謝恩金領收報告 池口 福雄君
- 金 拾 圓 木下 武夫 下平三雄
- 金 壹 圓 瀧澤銀次郎 (以上三名)
- 金 壹 圓 内田新之助君
- 金 壹 圓 岡西 猛君
- 金 壹 圓 白木 老雄君
- 林友代領收報告 箕部 覺明君
- 金壹圓五拾錢 青木 重俊君
- 金壹圓五拾錢 一之瀬 一郎治君
- 金壹圓五拾錢 古畑 要司君
- 庭球部へ特別寄附 前庭球部長佐藤誠一君より記念として又一
面同部の大いなる發展を望まれて左の通り
寄附ありたり茲に記して厚く謝意を表す
一金參圓也

(西) 蘇門出身林區奉職番附 (五月場所成績) (東)

張出青森山林 六級 小林桂一郎 (3) 張出秋田山林 七級原 (11) 張出前頭林技手 十級中川 源太 (13)

同	同	同	前	小	關	大	橫
秋山	京山	京山	森山	青山	京山	京山	京山
技手	技手	技手	技手	技手	技手	技手	技手
十級	九級	九級	八級	八級	七級	七級	六級
小林哲三	和田宗吉	森正夫	竹内房太郎	鷲澤忠治	松館藤太郎	高橋作治	齋藤正雄
(8)	(4)	(1)	(4)	(3)	(4)	(1)	(1)
同	同	同	同	同	同	同	同
東京全	秋田全	青森全	東京全	東京全	東京全	東京全	東京全
十八圓	十八圓	十八圓	十九圓	十九圓	十九圓	十九圓	十九圓
小谷益實	田中榮一	伊藤德之丞	長谷部真一	市川豐二	金井澄水	二木季人	藤田要吾
(10)	(10)	(9)	(10)	(10)	(5)	(11)	(8)
同	同	同	同	同	同	同	同
青森全	青森全	東京全	東京全	東京全	東京全	東京全	青森全
十五圓	十五圓	七圓	七圓	七圓	七圓	七圓	七圓
山崎兵平	山崎三雄	美則	老雄	九山嘉一郎	長崎千萬一	安藤晃	久保照人
(13)	(11)	(12)	(13)	(13)	(12)	(8)	(10)
全	全	全	全	全	全	全	全
和	藤	平	小	大	山	富	柳
田實也	原幾喜	田實	岩井茂樹	久保幸福	下不二三	士川鏡一	澤止之進
(15)	(14)	(13)	(14)	(16)	(14)	(14)	(12)

蒙御免 行司 青森、秋田、東京、大阪、高知、熊本、鹿兒島

各大林區署 年寄 檢査 役

木曾山林學校職員一同 元進 勸

岐蘇林友會

同	同	同	前	小	關	大	橫
京山	京山	京山	阪山	本熊	本熊	島鹿	阪大
技手	技手	技手	技手	技手	技手	技手	技手
九級	九級	九級	八級	八級	七級	七級	六級
島勘四郎	林省三	上條嘉一郎	原雛助	小藤作四郎	山下常記	古根是	原田義治
(8)	(5)	(4)	(6)	(3)	(2)	(1)	(1)
同	同	同	同	同	同	同	同
東京全	東京全	東京全	東京全	東京全	大阪全	大阪全	東京全
十八圓	十八圓	十八圓	十九圓	十九圓	十九圓	十九圓	十九圓
宮澤功	關谷靜夫	日野雅亮	中垣英一	中島信敏	松澤萬吉	小崎次郎	吉澤英雄
(12)	(10)	(5)	(11)	(10)	(5)	(12)	(6)
同	同	同	同	同	同	同	同
東京全	大阪全	大阪全	大阪全	大阪全	大阪全	大阪全	東京全
十五圓	十七圓	十七圓	十七圓	十七圓	十七圓	十七圓	十七圓
樋口	加茂憲太郎	有賀正一	曾我義郎	澤田富可	水上莊三	古畑金藏	西猛
(13)	(13)	(13)	(14)	(13)	(12)	(2)	(13)
全	全	全	全	全	全	全	全
藤澤甲子	家高碩二	小林盛大	熊本橫井正守	伊藤近良	北川春	原川只一	大澤田雄
(16)	(16)	(16)	(15)	(16)	(15)	(15)	(18)

張出東京山林 七級 中村 豊治 (1) 張出大阪山林 十級 古畑 七 (10) 張出高知山林 十級 柳原 武重 (14)

長野縣西筑摩郡碓冰町四〇四番地 正 天 長野縣松本市小柳町八十五番地 吉 藏

(定價金參錢)